

9. 外傷性脳損傷における表情認知の研究

県立広島大学 保健福祉学部 コミュニケーション障害学科¹

○丸石 正治¹

【背景と目的】

行政的高次脳機能障害のうち、記憶障害、注意障害、遂行機能障害については、それぞれ神経心理学的評価法が開発されていますが、社会的行動障害については、数値化が困難で、適切な評価法が提唱されていない。いっぽう、表情認知について、一般に人の表情は、喜び、悲しみ、驚き、怒り、嫌悪、恐れ、の6基本表情に分かれると考えられており、表情認識に関する検査として、6種の基本情動の一つを表す表情写真を呈示する方法が取られている。そこで、今回我々は、外傷性脳損傷における表情認知を数値化して、外傷性脳損傷患者の表情認知能力を検討した。

【対象と方法】

対象は、健常者71名と脳外傷者16名。健常者は大学生のため、平均年齢20.1歳、脳外傷者は平均年齢33.1歳で、脳挫傷10名、びまん性軸索損傷6名。WAIS-IIIは、VIQ, PIQともに低下を示しものの、平均値としては正常範囲であった。測定方法は、階段法を用いた(図1)。これは視力測定と同様の考え方で、表情に閾値を設定しています。すなわち、ATR画像データベースを元画像として、画像修正技術であるモーフィングを施し、表情を徐々にわかり難くした刺激画面を作成した。

【結果】

健常者では、喜び、驚き、怒り、悲しみ、嫌悪、恐れ順に閾値が示されました。脳外傷者では、閾値の順序は同様の傾向を示したが、6表情の全てにおいて、健常者よりも有

意に高い閾値を示した。

(症例1)

48歳男性、両側腹内側前頭前野の脳挫傷。WAIS-IIIは、VIQ86、PIQ80と、やや低値を示しており、表情認知についても、6基本表情全てで閾値の上昇を認めた。

(症例2)

28歳男性、右内側側頭葉脳挫傷。WAIS-IIIでは、VIQ90, PIQ89と正常範囲だが、表情認知については、喜びの閾値が1%だったのに対して、他の5表情の閾値は上昇していた。

【考察】

表情認知の低下について、これまで、統合失調症患者は表情認知障害をもつ(1974)、自閉症児は、他者の視線回避や社会接触の回避だけでなく、表情認識能力も劣っている(1993)、扁桃体に障害のある患者は笑顔以外の表情、特に恐怖表情がわからない(1999)、高齢者は、加齢に伴い表情認識能力が低下する(2003)などの報告がある。本研究は、外傷性脳損傷で表情認知が低下する(2007)という、これまでの報告を裏付けるものであった。しかしながら、表情認知能力は典礼とともに低下することが知られており、今後は年齢をマッチングさせた検討が必要である。

【参考文献】

熊田真宙・吉田弘司・橋本優花里・澤田梢・丸石正治・宮谷真人(2011). 表情認識における加齢の影響について—表情識別閾の測定による検討— 心理学研究, 82, 56-62.

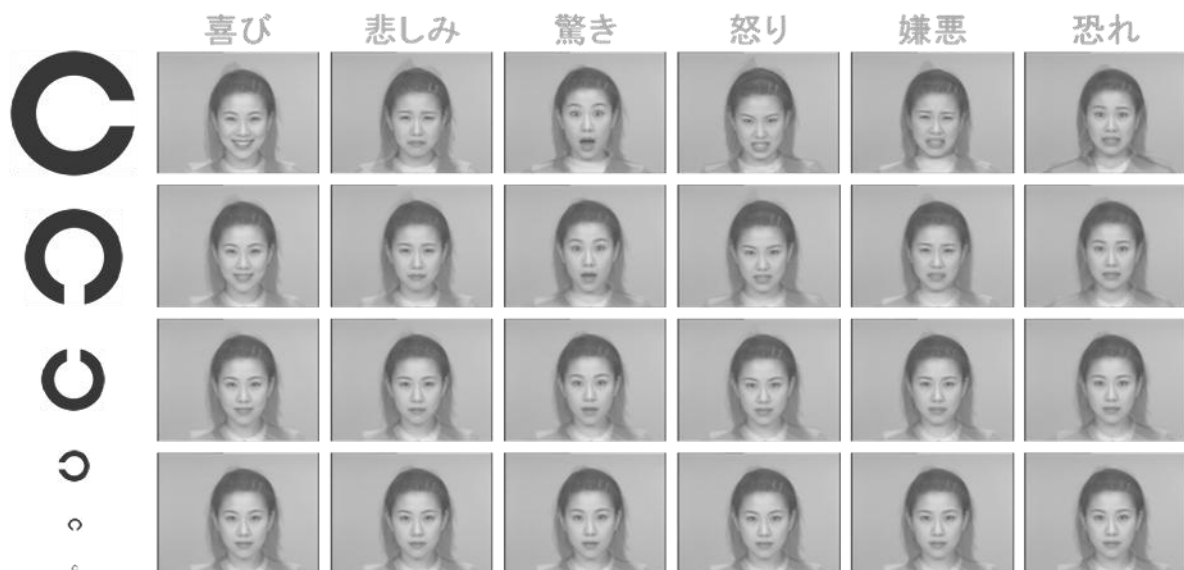


図 1